

令和3年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 京都市 】

学校名【 京都市立 日吉ヶ丘高等学校 】

1 実践テーマ	I II ・ III ・ IV ・ V (複数選択可)
2 実施対象者 (学年・人数)	第3学年 232名 (男子75名・女子157名)
3 展開の形式	(1) 学校における活動 教科名 () 行事名 (保健人権学習) その他 () (2) 地域における活動 イベント名 () その他 ()
4 目標 (ねらい)	<ul style="list-style-type: none"> ・障がい者スポーツでの交流試合、選手たちとの対話などを通して障がい者の方への認識を深めつつ、お互いの共通性を再認識し、自分の生き方を考える機会とする。 ・様々なことに対する偏見や誤解を払拭し、多様性を認め合い皆が共存しながら生きていきやすくなるためには、社会がどうあれば良いのか考える機会とする。
5 取組内容	<p>1 事前学習</p> <p>(1) 事前意識アンケートの実施・選手への質問リサーチ 体験生徒・介助生徒の選出・介助生徒への事前学習</p> <p>(2) 動画「目指せ2020年のパラリンピアン」などの視聴 ・車椅子バスケットボールのパラリンピック代表選手である鳥海連志選手の高校生時のドキュメンタリー映像と、東京パラでの鳥海選手の活躍動画（資料作成）</p> <p>2 車椅子バスケットボール選手をお迎えして（11月10日）</p> <p>(1) 校長の挨拶</p> <p>(2) 坂野先生（コーディネーター）より 選手紹介・競技説明・模範演技 ・生徒は、選手の方の素早い力強い動きに驚き、歓声を上げて見入っていた。高校生選手の動きには、ひととき大きな歓声が上がっていた</p> <p>(3) 車椅子バスケット体験試合（クラス対抗） 生徒5名と選手1名の計6名チームでの対抗戦を実施。</p> <div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・なかなか思うように移動ができないことや、上半身だけでのシュートを打つことの難しさなどを実感しながらも、選手の方にゲームメイクをしていただき、真剣に一生懸命プレイしていた。 </div> </div> <p>(5) 選手の方との直接的な交流・お話・質疑応答 5グループに分かれ、車座になって選手の方の話を聞いた。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・病気やけがなどによる障がいに至った経過や、車椅子バスケットとの出会い、普段の生活での周りの人との関わりなど、具体的な話を聞かせていただいた。 ・生徒も、始めたきっかけや続けられる原動力、普段の生活における困りごと、障がいがある方に対してどのような声のかけ方が嬉しいか、などを率直に質問するなど、双方向の交流ができた。 ・生徒たちは熱心に、食い入るように講師の方の話を聞いていた。 <p>(6) 坂野先生より、障がい者の割合の現状などの説明</p> <p>(7) 生徒代表からのお礼の言葉 介助生徒や希望生徒による退室補助、交流、お見送り。</p> <p>3 事後学習</p> <p>(1) 体験・交流直後に事後感想記入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒は、選手のプレイだけでなく、その後での交流で知った生き方に、とても感動していた。 ・何気ない毎日の大切さや、周りの人とのコミュニケーションや支え合いの心強さ、そして何よりあきらめず前を向き、できることを見つけて進んでいく強さに、自分の今後の生き方を重ね合せていた。 <p>(2) 生徒それぞれの思いを共有して、もう一度考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の振り返りの言葉 より 「これから先、どんな壁にぶつかっても諦めず、「強い心」を持って生きていくことが大事」「夢やつかみたいもののために努力を続けること、目標を持ち続けることが大切」 「一人一人を尊重し、向き合うことが様々な人が生きる社会で必要」 「迷わず、手を差し伸べることができる人になりたい」
6 主な成果	<ul style="list-style-type: none"> ・事前アンケートでは、障がい者スポーツに興味がある生徒は全体の65%、実際に見たことがあるのは東京パラの影響か、以前より増え55%くらいであった。今回の学習により、間近で見てプレイを体験し、障がい者スポーツを、一つのスポーツとして、より身近に感じていた。 ・障がいがあってもできることの多さを知り、一つの性質として受け止めることで、多様性の混ざり合う社会での心の持ちようの一助になった。 ・選手の方の話で、普段の心の持ち方や前を向く姿勢、あきらめない強さ、周りの人の支えの力の大切さを感じ取り、人として大切なのは、障がいのありなしに関係なく、気持ちの持ち方、生き方であることに気付いた。 ・日常での周りの困りごとにもっと目を向けたり、声をかけたいという意識も高まった。
7 実践において工夫した点(事業の特色)	<ul style="list-style-type: none"> ・体験することだけに重きを置くのではなく、事前に1人の具体的な障がいのある高校生の車いすバスケットに対する取組み姿勢、かつその選手の成長を実感できる東京オリパラでの活躍を紹介することによって、興味関心を高め、交流当日に臨んだ。 ・障がいのある方との交流は、日常ではなかなか機会がないので、少しでも近い距離で言葉を交わし、感じていることをお互いに交流できるよう心掛けた。 ・体験や、見たことだけに終わらず、その後の自分自身の生き方にまで思いをはせるよう声のかけ方を意識した。
8 主な課題等	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事を休んでくださる選手の方への謝礼金の捻出が課題。 ・多くの方に来ていただくと、生徒との交流がより近くなり、効果的であるが、費用の面でハードルが高い。 ・競技用車いすを借りる場合の日程調整や、運送費用も課題。
9 来年度以降の実施予定	<ul style="list-style-type: none"> ・多様性のある社会での共生をテーマに考えたとき、障がい者スポーツは一つの意識の変化のきっかけになる体験型の学習で、大変貴重である。 ・費用面での問題が生じるが、来てくださる選手の方とのつながりを維持する意味でも、何とか費用を捻出し、来年度以降でも実施を模索したい。